（別紙２）　　審査の結果の要旨

氏名　　堀川貴司

本論文は、院政期から室町時代末期までの漢文学について、漢詩を中心として、その特質を解明しようとするものである。まず冒頭の「総説」において、句題詩の詠法を明らかにしたうえで当該の時代の漢文学を歴史的に展望し、合わせて本論文の全体の方法と趣旨を明確にしたのち、本論を二部十九の章から構成する。

第一部「院政期・鎌倉時代」は、六つの章から成り、主として「句題詩」の方法を基軸としてこの時期の漢文学の作品を分析する。最初に漢詩文作法書や実作をもとに、句題詩の詠法の形成を具体的にたどり、これを無題詩の詠法と対照させて明確化する（第一章）。一方無題詩の意義を、句題詩と対比しつつ『本朝無題詩』の作品分析によって究明する（第二章）。下って鎌倉時代では、漢詩句と和歌を番わせる詩歌合に着目し、新古今時代の『元久詩歌合』を句題詩の詠法を基準に分析し、和歌に近づくことが王朝漢詩の衰退につながったと見（第三章）、また『新古今集』真名序に、「漢」への対抗意識を読み込む（第四章）。さらに、漢詩文作法書『真俗擲金記』が偽作であること、またその成立の背景を推定し（第五章）、現存詩懐紙を博捜することで、懐紙作法の固定化と、主要な詩体が七言律詩から七言絶句へと変化することを跡付ける（第六章）。

第二部「南北朝・室町時代」は、十三章から成る。鎌倉中期以降の新たな漢文学の潮流である禅林の文学、すなわち広い意味での五山文学について、政治・社会の状況や他ジャンルの文学との相関に留意しつつ、漢詩を中心に論じる。まず瀟湘八景詩を通観し、禅林の文学の表現の様相の詩的展開を把握する（第七章）。禅林と権力の結合を象徴する存在である足利直義の生涯を、その政治と信仰の葛藤に力点をおいて論述し（第八章）、彼の生み出した重要な作品である等持院屏風賛について、成立や為政者賛美の構造を指摘し（第九章）、大慈八景詩歌の政治的背景や内容を分析し、かつ原本断簡資料を紹介し（第十章）、五山文学の代表詩人絶海中津の作品の政治性を分析する（第十一章）。また、禅林文学において最も著名な一休については二章を割き、その作品『狂雲集』・『自戒集』の表現性に新視点をもたらす（第十二、十三章）。ついで中世以降の中国文学の受容史上重要な『三体詩』『錦繍段』について三つの章をあてて、それらの成立や文献学的側面、また受容の様相について考察する（第十四、十五、十九章）。その他、禅林における白居易受容に照明をあて（第十六章）、英甫永雄ほか禅林ゆかりの作品群を、近世文学と関わらせつつ読み込む（第十七、十八章）。

本論文は、中世の漢文学について、歴史的背景に周到に目配りし、行き届いた書誌学的・文献学的手続きを経た上で、高い説得性をもって漢詩作品を読み解き、多くの新事実を明らかにする。中でも、漢詩の創作および享受に関わるさまざまな場に注目して、その方法を解明したことは、既往の研究では文学的価値を発見しがたかった多くの作品に新たな照明を当てることになった。しかもそうした成果を積み上げつつ、中世漢文学史の見取り図をスケール大きく描き出している。優れた展望を生かすためにさらに考察を深めるべき箇所など、今後の課題もまた存するが、本審査委員会は上記のような研究史的意義を認め、本論文が博士（文学）に十分値するとの結論に至った。